今日 6 月 1 日(土)～2 日(日)の一泊二日で、「田中正造と足尾銅山鉱毒事件ツアー」に出かけます。東京・千葉・神奈川・埼玉の関東圏の他に、福岡・大阪・愛知・富山からも申し込みがあって、全部で 28 人。昨年は「公害 第 1 号」とも言われる足尾銅山の閉山 50 年という区切りの年でしたが、大きな話題にはなりませんでした。さて、いったい「公害」とは私たちにとって何か？　現場を歩いて考えてきます。

2023年(令和5年)9月4日(月)　朝日新聞

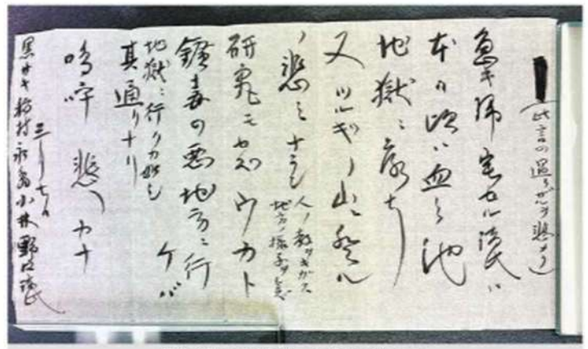
天声人語

いまでは、いささか想像しがたいことだろう。明治の時代、この国で初めての衆院選が行われたときのことだ。有権者は投票用紙に自らの住所と氏名を明記したうえで、捺印もする必要があった。秘密投票の権利など、まるでなかったわけである▼後にこれを改め、無記名投票とする改正法案が議会に出された。意外に思う方もいるかもしれないが、法案に反対した議員の一人が、足尾銅山の鉱毒事件で民衆の先頭に立って闘った、田中正造だった▼理由は何か。正造が常々嘆いていたのは、人々の政治への無関心さだった。「国民が監督を怠れば、治者は盗を為す」。名前を記すことで、有権者に投票への「責任」の意識を強く持ってもらうべきだ、と正造は主張した（小松裕著『田中正造』）▼記名投票にはうなずけないが、正造はそれほどまでに国民の政治参加の意義を重く考えたのだろう。「個人の幸福は集まって国家の利益となる」。そんな言葉も残している▼足尾銅山の閉山から半世紀。きょうは正造の没後110年である。その歴史は「最悪の公害」とさえ言われる福島の原発事故と、その後の原発再稼働の動きとも重なって見える。国益の名の下、個の暮らしの安全が蔑ろにされてはならない▼「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず」。正造の至言は時代を超え、輝きを増す。私たちは、しかと政治に参加しているか。政治家まかせにはしていないか。残暑厳しき初秋の日、不屈の人の声が低く、聞こえた気がした。

2023・9・4

2023年(令和5年)9月9日(土曜日)　東京新聞(夕刊)

怒る正造 転機の書簡



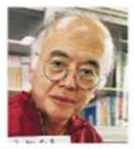
正造が同志宛てに出した「怒りの書簡」

田中正造＝佐野市郷土博物館提供

血の池地獄ニ落ち、ツルギの山に登ルノ悲シミならん

足尾銅山鉱毒事件の解決に生涯をささげた政治家、田中正造（1841～1913年）の“怒りの書簡”が、栃木県の佐野市郷土博物館（大橋町）で見つかった。住民運動が弾圧された「川俣事件」の後、戦意を失って帰郷した同志に向け「血の池地獄ニ落ち、ツルギの山に登ルノ悲シミならん」と強い筆致で批判している。住民運動が行き詰まり、明治天皇への直訴に向かう転機となった時期。当時の正造の心情が生々しく伝わる貴重な資料だという。（梅村武史）

栃木・佐野で来月7日から展示



「正造は正義感が強く一徹な面もあったが、これほど感情を爆発させた書簡は見たことがない。焦りと憂いが伝わってくる」。書簡を分析した山口明良館長(63)＝写真＝は力を込める。

川俣事件は1900年2月、政府への請願に向かう農民ら2500人が、警官隊と旧佐貫村（現・群馬県明和町）で衝突、多数の検挙者を出した弾圧事件。51人が起訴され、1年以上拘束されて厳しい取り調べを受けた者もいた。

書簡の日付は1901年3月7日。最後の1人が釈放された時期だ。

山口館長の意訳によると、内容は「急いで帰宅した諸氏は今ごろ血の池地獄に落ち、剣の山に登る悲しみを抱いているだろう。人の教えを聞かず、地方の様子は知らず、研究することもない。（中略）あ、悲しいな」。正造の大きな憤りが読み取れる。

送り先は栃木、群馬両県の鉱毒事務所だった雲龍寺（群馬県館林市）で、宛名には同志の黒崎禅翁住職らリーダー5人の名が連なり、回し読みするよう求めている。住民運動の再開を期す正造と、疲弊した運動員の間で亀裂が生じていたことが分かる。この9カ月後、正造は単独で天皇直訴を決行する。

正造の出生地にある市郷土博物館は、寄託分を含め約1万3千点の関係資料を収蔵しており、順次解析を進めている。

書簡は、正造と活動を共にした黒沢西蔵（1885～1982年）が所有していた文書（田中正造全集未収録資料）から見つかった。

佐野市郷土博物館は10月7日～12月10日、正造没後110年記念企画展「未公開文書からたどる田中正造」を開催する。この“怒りの書簡”をはじめ、天皇直訴状の起草者、幸徳秋水（1871～1911年）が正造宛てた手紙など約80点を初公開する。

住民運動行き詰まり 天皇直訴へ

栃木 13版　2023年(令和5年)8月18日(金)　朝日新聞

真の文明とは…軍備全廃論

田中正造　日露戦争前 すでに非戦論

反骨の記録 3

戦争に抗った人たち

今年3月に亡くなった坂本龍一さんは、田中正造（1841～1913）の言葉にほれ込んでいた。環境・平和問題に取り組むなかで出会い、東京電力福島第一原発事故後、繰り返し国内外に紹介した。

「真の文明ハ山を荒さず、川を荒さず、村を破らず、人を殺さざるべし」

田中は文明をどうとらえたのか。足尾銅山の鉱毒による環境破壊だけではない。戦争にも文明の「暴力性」と「加害性」を見たのだろう。犠牲を強いられる民衆に目を向け、「非戦論」を進めた「軍備全廃論」に行き着いた。

日露戦争（1904～05年）のころから演説で「海陸軍全廃」を訴えている。

「日本が世界の前で素っ裸になる。海陸軍の全廃だ。軍艦なぞ、中国、ロシアへくれてしまえ。この正直な力、どこから攻めることができるものですか」（田中正造全集第4巻）

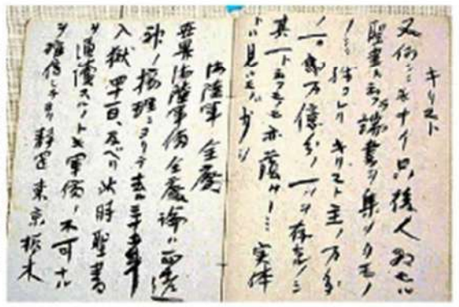
晩年の13年3月31日の日記には、02年に入獄した時、聖書を通じて「全廃」を確信し、栃木や東京などで演説したと回想した。

■　■　■

しかし、そんな田中にも戦争を支持した時代があった。入獄の7～8年前、田中は日清戦争（1894～95年）に理解を示していた。生地の佐野市にある郷土博物館の資料がそれを裏付ける。

栃木県有志の一人として出征兵に贈った文書（1895年3月23日付）には、「四百余州（中国全土）を蹂躙するの壮絶快絶（勇ましく爽快）」などと戦意を高揚させる言葉が並ぶ。

田中正造旧宅＝佐野市小中町



「世界海陸軍全廃論」を確信した時のことを回想する晩年の田中正造の日記＝佐野市郷土博物館所蔵

山口明良館長(63)は指摘する。「挙国一致を重視し、そのころは鉱毒問題の追及も手控えました」

その間、足尾銅山は増産態勢を続ける。銃砲弾などの原料に銅は欠かせなかった。山口さんは「渡良瀬川流域で鉱毒被害が進み、農民が戦争に駆り出されて犠牲になる、という二重の苦しみに見舞われた」。田中は日本人以上の犠牲者を出した朝鮮半島の状況にも心を痛めた、という。

同館によると、田中は日露開戦の前から「非戦論」を主張した。日記では「（日清戦争）日本は中国に対する他愛心を失った」と嘆き、政府が鉱毒問題より対ロシア問題を優先していると批判している。

さらに、戦争が一部の企業や人間にとって金もうけの絶好の機会となっているとし、便乗して投機的な動きをしないよう戒める手紙も残る。

■　■　■

昨年9月、半世紀に及ぶ歴史がある「渡良瀬川研究会」の第230回学習会で、田中の『軍備全廃論』が取り上げられた。足尾鉱毒事件田中正造記念館（群馬県館林市）の島野薫事務局長(76)が、ウクライナとロシアの戦争など今の問題に引き寄せながら、考える材料を提示した。

田中は「20億の軍事費を全廃すれば、10年間は税金を払わなくても済む」と説いた。「非武装国家」になる暮わりに外交力の強化を掲げた。「外交予算を30倍、300倍に増やし、日本が世界平和の唱道者になるべきだ」「学生を世界中に派遣し、軍備全廃や世界平和の伝道者になってもらう」と提案した。

島野さんは思う。「国家間の戦争が正義とされた時代の主張だけに重みがある。日本は防衛費拡大を続けているが、田中正造が生きていたら何と言うか」

「海陸軍全廃論」などが書かれた手紙や日記は、佐野市郷土博物館で展示されている。今年は没後110年。その思想は今なお、光を放っている。（中村尚徳）